

ランチョンセミナー 5

生物学的製剤生誕から20年、 バイオシミラーの位置づけ

会場

第2会場

アートホテル盛岡 (3F 鳳凰の間)
〒020-0022 岩手県盛岡市大通3丁目3-18

2023

10/1 (日)

12:00~13:00

座長

櫻庭裕丈 先生

弘前大学大学院医学研究科
消化器血液内科学講座 教授

演者

加藤 将 先生

北海道大学病院
リウマチ・腎臓内科 講師

生物学的製剤生誕から20年、バイオシミラーの位置づけ

北海道大学病院 リウマチ・腎臓内科 講師

加藤 将 先生

2003年にインフリキシマブが関節リウマチに対する初の生物学的製剤として本邦で適応を取得してから20年が経過した。2023年現在、TNF阻害薬6剤、IL-6阻害薬2剤、T細胞選択的共刺激調節剤1剤、合計9剤の生物学的製剤が使用可能で、JAK阻害薬5剤を合わせると、メトトレキサート効果不十分例に対する選択肢は14剤にまで増えた。また、2014年にインフリキシマブのバイオシミラーが登場して以降、2018年にエタネルセプトのバイオシミラー、2020年にアダリムマブのバイオシミラーが登場し、選択肢はさらに増えている。バイオシミラーはその一番の魅力が低い薬価であることは言うまでもないが、その他にも、ジェネリック医薬品とは異なり臨床試験を経て承認されていることや、注射時痛、注射部位反応の軽減を目的とした薬液の改良、新しい技術で作られた注射デバイスといった長所を有する。一方、実臨床においては、後発医薬品に対する不安などから発生するノセボ効果が足枷となり、バイオシミラーの有効性が十分に発揮されないケースがある。本セミナーでは、関節リウマチ治療薬の豊富なラインナップの各々の有効性を十分に発揮するために今後何が必要かについて議論する。

(利益相反:有)

